

懸賞小説

戦死長家

京都府龜岡町 栗女史

(一)

戦死長家と云へば、界限に誰知らぬものもない五軒長家。

今しも其の細い露地口から、流場漁りの風來犬が、水を浴せられたかびしよ濡になつて尾をすぼめながら、遁げて出るのと入違ひに、身長ひより高い郵便配達が入つて行つたが、湿々した突當りの共同井戸の處を右に折れて、戸毎に表札を檢べて一番奥の處に到ると、其の表札と手の郵書とを見くらべて一聲大きく「郵便」と呼んで、格子の隙から投込んで又すたくと引返して行つた。

「お三輪さん處へ來たんだね。」と、其の配達の後を見送りながら言つたのは、井戸端に米を研いで居た束ね髪のお女房、今一人のは耳の

下に大きな腫物のある廿二三の肥太女、眞赤な手をし

て冷たさうに牛蒡を洗つて居たのが、

「何處から來たのか知ら。」

「さア何處からだらう、叔母さんから來たのでもあるまいが……。」

彼等傭衆の常として、這麼入らぬ詮議立をする。若い方は精々と洗ひながら、

「何だつてね、叔母さんと云ふのは相當に暮してんだつてね。」

「てえけれど當になりは爲無え。長さんの葬式の時鳥渡來たが、何だかいやに大風な、其の癖慾の深さうな婦人だよ。」

「でも香奠を一枚奮發だてて評判ぢやないの。」

「ふん、何うだか……。」

「此頃でも幾らかづゝ貰いでるつて事も聞いてるが、爾うか知ら。」

「何うだか分りや爲無え。」と、束ね髪はせうら笑つて、

「貢ぎ人があるにやあるだらうが、本當に叔母さんが貢いで呉れてるのか何うだか……ふん、だが何だよ、兎に角婦人會とやら報効會だとかやら彼方此方から幾らかづゝ貰ひ物はあるし、遺族扶助料とかいつて政府か

ら下賜もあるし、何しろお三輪さんは幸福さ、那して女手一つで病人の姑アから子供から自己と三人口安氣に過して行くんだからね。」

「能く行ける事ね。」

「それがお前さん。」と、にやりと黒い眼を出して笑ひながら、「何れ所由が無くつてさ、那樣僅かッばかりの知れた貴物位で、何うして病人一人だけだつて立過して行けるもんかね。」

「ぢやア、所由つて甚麼所由？」

「は、まだ御存知なしたアお前さんも頓馬だよ。一月ほど前から能く來る拇指を知らないの。唐棧の羽織に森村か何かの豪勢に光つた服裝をした男をよ。」

「おや彼れなの、三十位の氣凛とした……へえ、私ア又何とか會の役員かと思つて居たの。まア呆れた。」

と眼を圓くする。

「役員は何時も洋服だわね。」

「ぢやア何うした男子の、彼れは？。中々男らしい男のやうだわ。」

「はッはッ、最早や岡惚れてるよ此の娘は……。」と、既に研上つたのに歸らうともせで古女房は喋り續ける。

「あれは何でもね、昔馴染なんだよ、それが久々で邂逅

近つて尋ねて行つたり來られたり爲てる内に、貧乏は爲てゝもお三輪さんは那した程好だから出來合つて了つたのだ。でも幸福ぢやないかね、戦死長家と云はれて此の五軒長家から四人まで兵に取られて行つたのが彼方や此方の戦争で皆な戦死して了つて、家族は何れも眼も當られない酷目なもので、這麼くされ長家にさへ住み兼ねて何處かへ立退いて了つたのに、お三輪さんばかりは那して立派な生活を立てゝ行かれるんだからね。」

「那樣ですの。ぢやア焼木杭に火が付いたてえんですね。若いのに後家で呪りやつて行く感心な人だと思つて居たのに……。」

「人は當にならなないものよ。尤も長さんが生きてる内は神妙に留守居をして感心がられて居たんだけれどね、女てえもんは堅いやうでも脆いもんさね。此頃向ふへ行つて見るが可い、子供までが素晴らしい玩具を持つて遊んでるわ。」

「へえ、矢張り女ツ振りの好いのは徳ですわね。」

と、頻りに喋々して居る處へ、反齒の女房が出來来る、續いてぶくく太つた眼の悪さうな婆と跛の小娘がやつて來る、何れも同じ口善惡なさ、聞くにも堪へぬ蔭

議に上つた病人の姑に今年三歳の男の子、それを嫁
のお三輪が手一つに立過して居るのである。
姑はまだ左までの老年でも無のであるが、長造出
征前より中氣でぶら／＼して居たのが戦死と聞いてが

つくり、氣の張も抜けて一時に年を寄せて、べつたり
 癖に就いて了つた。其の看病と子供の世話とに、お三
 輪は授産會から廻して呉れる内職さへも掛々しからぬ
 有様なので。

「郵便」との聲に、今も甲斐々々しう姑の背をさすつて居たお三輪は立つて投込まれた端書を拾ひ上げ、一寸差出人を見て、裏を返して讀下しながら又元の座へ戻つて來ると、姑は顔を向け、

「何處からだえ。」

『叔母さんからですの。何だらう、御談合致し度きことと有之この端書着次第お越し下され度……。』と讀んで眉を顰める。

『それぢや直ぐ行かにやならんわねえ。』

『何有、那樣に急ぎは爲ませんでせうよ。』と、端書を片傍に置いて、『少し横にお爲んなさい、一摩して御飯に爲ませう。』

『いやの、最う結構か樂になりましたよ。』と、嫁ではあ

だよ、
神様のやうに思ふよ。』

と、心から言つて涙なみだ賢さとしる。お三輪さんりんも何なんと知しらず胸むねが一杯いっぱいになつて、つい潜ひそりここもも。
と、心から言つて涙賢る。お三輪も何と知らず胸が一杯になつて、つい潜りこも。

『最^もう暮れるさう

からうで、鳥渡行つて來さつしやれ

『の』

「はい、ちやア……。」と手を止めて、
ちやうど かみよ うしな、

お

たから、それぢやア食つて了つて下さ

「い
な
」
わ
た
し
の
ち
い
た
い
ち
つ

いゝの、私は後に頂きませう。些と

も
お
腹
か
減
か
な
い
で
の
……
『
爾
う
で
す
わ
た
し
か
へ
』

「爾^し下^し豆^しか^し 亡^しヤ^し私^しも^し 歸^しつて^しから^し

いふに、
てき
けど手廻は掛
甚だ昇事か知らない

それぢやしはくふじう暫寺下い自由う二下

い、
ついでに、
かへりま
すからな
……。＝

で、
お三輪は立つて
おびし
なほ
はん

纏こまだけ小増こましななののにに着き更かへてて。今いままでまで

玩具で機嫌よく遊んで居た子に、

龜さんと云ふ豫備の上等兵が第一に南山で戦死、次いで留さんと云ふ補充兵が遼陽で同じく戦死、同じ戦争に後備歩兵で勇さんと云ふのが行衛不明、多分戦死だらうと云ふ事、而して最後の奉天戦に長さんが戦死をした。五軒長家から四人まで兵士を出したのは既に異とすべきなのに、其の四人が四人まで戦死したと云ふに至つては異中の異、惨中の惨で、忽ち界限に廣まり新聞にまで載せられて戦死長家の稱をさへ得たのである。が、遺族は何れも三人五人とあつて、最初は奉効會とか何婦人會とか稱する團體より多少補助もされ近邊の義人から賑恤をも受けたのであるが、肝腎家の柱たる働手——家に在りし時でさへ動もすると細い煙を立て兼ねた長家生活の、それを失つては僅かの賑恤で何うして煙が續かう、相繼いで何處ともなく落ちて行つて了つたのだ。で、今尚ほ踏えこたへて居るのは唯最後に戦死した長造の遺族ばかりで、今も井戸端會

るが氣を兼ねて辭退をする。お三輪はそれが
いちらしく、

『何なんの姑おつかさん那樣遠慮えんりよが要いるもので
すか。此處こゝを斯かう爲しろとか那あしろと
か、どし／＼言付いひつけて貰もらはないと拙まづ
按摩あんまですから利ききや爲しませんよ。
はゝゝ。』

『何のお前……』と、
姑は早やほろ

りと爲たが、それでは此ほんの最もうざつ

とで宜しいの……やれくいかい

世話を掛けます。寧ろ死ねばと思ふ

けれど死ねなけりや爲方も無しね、

お前には氣の毒な目に逢はせ

事ぢや。』と染り云ふ。
またあんなぐち
おつしや

又那麼愚痴を仰有る。死

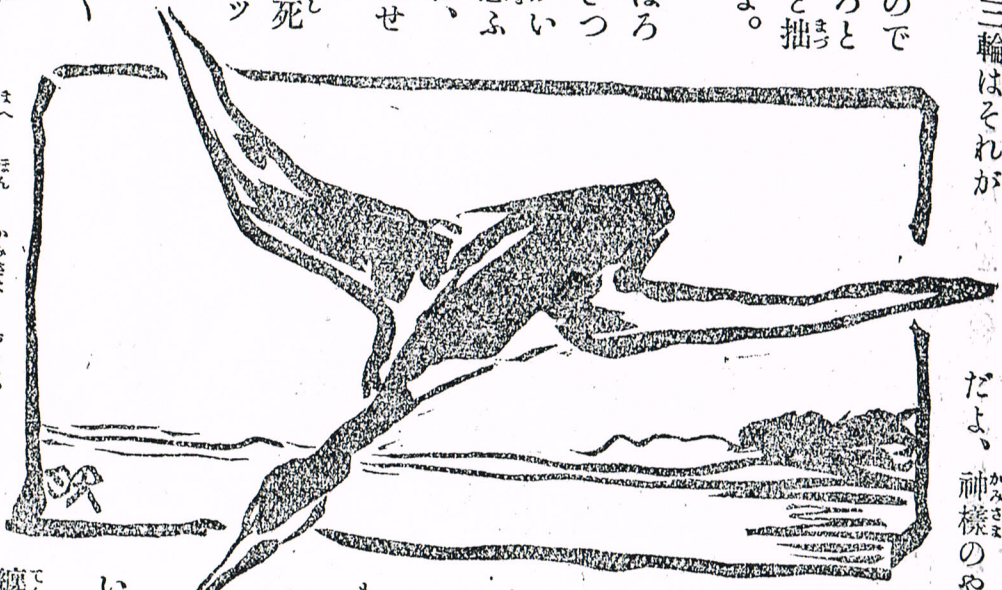
めんなか不吉なことは姑さん言ひツ

家よめに遠慮えんりょが可なにい要わづらなしと打消して

病へ
 かいほう、
 遠慮が何
 必要ませう、
 あたりまへ
 介抱するは
 當然のもの。

思はな
い
で
尋く
決く
なつ
て
頭
裁
○
一

「お、好よく言いつてお呉くしど。お三みつ唄、



— (222) —

— (223) —

『さア、平坊や、お出でな、負して叔母ちゃん處へ連れてつて上げやう。おや玩具を持つて行くのかい、それぢやア此方を持つてお行きな。ほら、くるくく、ね、好く舞ふわね、ほくく、くく。』

『はい、祖母ちゃん行つて参ります。』

(三)

『おや、まだ欲しいと言ふのかい、一杯手に持つてで慾張屋さんだね平坊は……』

と、叔母は菓子鉢の干菓子をも更に二つばかり摘んで這寄つた子に與へ、己れも一つを口に入れて食難さうにもぐつかせながら、

『それでね、失禮なやうだけれどお三輪さんの方も厄介はあり困難なお手元さうだし、何うか爾う云ふことに承知して貰へりや此方は此の上の歡びはありませんでね、それは、太い執心なのよ。それね、これが通り一遍の知合ひと云ふのぢや無くて、何しろ背中に負さつて小大便を垂れてた時分から十五六までと云ふもの、兄妹同様にして居たお友達で、お互ひに氣心は腹のどん底まで吞合つてゐるのだからね、これが纏まりや先様にして此方にしては誠に好いことだと思ふのよ。』

『さア、平坊や、お出でな、負して叔母ちゃん處へ連れてつて上げやう。おや玩具を持つて行くのかい、それぢやア此方を持つてお行きな。ほら、くるくく、ね、好く舞ふわね、ほくく、くく。』

『はい、祖母ちゃん行つて参ります。』

『そりや誰しも斯ういふ場合には考へにやならん、第一女の操といふ事を考へないではない、お前にしても考へてお居でだらう。だけれどもね、能く考へてお見、這麼齒の抜けた婆が若いものに云ふのは些と逆ま事のやうだが、今は女大學時分とは時勢が全然變つてゐるは言ふまでも無いこととで、場合によつちや再縁もせにやならん。能く言ふ事だが、二十歳の後家は立てられても三十の後家は立てられないとやらで、一生後家でも通さうの覺悟は一寸聞えは立派のやうだが、若しかそれが間違つた事でも爲出來して御覽な、却つて罪も罪も大罪ぢや無からうか。ね、それが又間違ひ易いもので、誤し自分に浮いた考へが無くとも、世間が許さん。人が見通して置かない。強いやうでも弱いのは女だからね、此の後家を通さうの一生獨身で行かうのと云ふのは、危なくつてそれで自分には始中終苦しい、で苦しむ暮しを爲無くちやならんものだから、餘程思案ものだよ。ね、だからさ、後に至つて萬一かして浮名ける。』

を語られるやうな危うかしい道を行くよりか、今の間に身の振方を付けつちまふ方が安全だらうぢやないかね。それもこれが無理な話が仙彌さんは心底からの親切で、子は元より姑まで引取つて世話して遣らうと仰有るのだもの、誠に能く分つた有難い話、お前にして見れば姑を捨てないで何處までも先の長さんに言譯の道も立ち、世間に對しても些とも疾しい處はない。私はお前の思案もあらうから、まア篤と胸と相談してお見か可い。』と、ねちく説付けて叔母は一先づ口を噤んだ。

お三輪は深い考へに沈んだ。

今お三輪の頭には無邪氣な子供時代が宛ら夢を繪にしたらんやうに茫乎として美しく浮ぶのであつた。今叔母を通じて懇望する仙彌とお三輪とは他愛もない友垣を結んで、時としては人から調戲はれて顔を赤めることもあつたのだが、十五の年にお三輪の一家は商業の失敗から他に移り、次いで仙彌の家も破産してこれは上方へ落ちて行き、それ限り行衛を失つて了つたので、其の頃物心つき初めた此の兩者の胸には、言はず語らぬ恥かしい戀情の芽含んで居たのであつた。其の

芽は互ひの行衛と共に摘れて了つたのだが、つい一月ばかり前計らずも此の二人が途上て邂逅つた。其の時に來再び交誼は結ばれたので。而して仙彌は今己れの可なり幸福を贏か得て平穩な月日を送つて居るに反し聞くさい傷ましいお三輪の境遇に同情するの心と、一つは己れ先年不幸にして妻を先立て家事に不都合を感じる折柄、今なほ時折は思出されもする初恋の相手の、貧苦な中にも萎れ切らぬ殘んの色香を憎からず思ふ心とは、遂にお三輪の叔母を介して、家族諸共引取らう來て呉れまいかと打出すに至らしたのであつた。あゝ初恋、誰しも一生の記憶の頁に記されて消えんとするも消えざる初恋、それが斯うした成行に運んで來た時、誰しの心か惑はざるべき、亂れざるべき！お三輪は頓に決し兼ねて。叔母より返辭を促さるゝに及び、思ひ倦んだ顔を僅かに擡げて、

『何卒二三日考へさして下さいな。』

(四)

『子供と阿母さんを屹度頼むよ。國家の爲めだ、私の上は案じて呉れな。』と雄々しう言ひながら眼を濕まして立たれた夫の姿の髣髴として眼に見るやう。と、忽ち血みどろの軍服を着てよろばひ寄り、此の腐肉女

奴、勇士の顔に泥を塗るか、操は捨て、も子や親を養へば可いと思ふか！」と、悲憤に血走る眼に睨めらるゝ。猶豫を乞ひ、好い返辭で無ければ後の涙は知らぬときめ付けられての歸途、思ひ沈み考へ惑ひつゝあると忽ち斯ういふ夫の幻影に襲はれたのであつた。愕然として我に歸つたお三輪は悚然として戦いた。而して錐のやうな夜風の中に立竦むこと良久暫時、『迷つたのは悪う御座いました。堪忍して下さい。』と、痛切に低く叫んで、私は名譽ある戦死者の妻だ、戦争熱と共に人の同情は次第に冷め唯一人の叔母さんからは捨てられて、これから以後甚麼辛い目を見るか知れないけれど、何者、石にかじり付いても子や親を養つて行かう、何處までも名譽ある戦死者の遺族たる名を傷けまい、汚してはならぬ！と斯う確く心に決した。而して勢能く歩き出して、大空には寒星が一面に牙え渡つて居る。

評、文章流暢にして觀察も亦すぐれたり。されど作者小説にまよめんが爲めに、事實を輕視したるは、甚だ惜むべし。最後の一節、これあるが爲めに、作者の人生に對する思想の幼稚なるは歴々として指さすべく、三輪の決心のかく容易に翻らんことは有り得べしと思はす、作者の爲めには、愕然として……より以下の文字を削り去るをよしとす。